

幼児体育を通して豊かに表現する力の育成
—小学校への連続性を取り入れたクロスカリキュラムによる学び—

鳴 澤 吉 紀

Fostering the ability to express abundantly through infant physical education
—Learning with cross curriculum incorporating continuity to elementary school—

Yoshinori Narusawa

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

幼児体育を通して豊かに表現する力の育成

—小学校への連続性を取り入れたクロスカリキュラムによる学び—

Fostering the ability to express abundantly through infant
physical education

—Learning with cross curriculum incorporating continuity to
elementary school—

鳴澤 吉紀

Yoshinori Narusawa

1 はじめに

社会のグローバル化や国際競争・協力の必要性が益々増大し、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を身に付けさせるためには、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を育む教育の充実を図ることが大切である。そのためには、学びのスタートラインである幼児期の教育【幼稚園、保育所、認定こども園における遊び】と児童期の教育を円滑に接続して体系的な教育を始めることが極めて重要である。さらに、新たな教育方法と内容、教材を工夫して行うことなど、時代の変化とともに様々なカリキュラムを考案、実践することが求められている。

(1) コア・カリキュラムから総合的な学習の時間へ

教科の枠を超え、子どもたちの生活に関わる問題の解決を図る中で、知識理解と態度・能力を統一的に育成するために、「中心課程」とそれを支える「周辺課程」から構成するコア・カリキュラムが第二次世界大戦後盛んに行なわれた。しかし、予定した時数以上に時間がかかり、身に付けなければならない基礎学力の時数が削減され、低下を招くなどして次第に行われなくなってきた。

その後、子どもが自ら学び自ら考える力などの生きる力の育成を目指した総合的な学習の時間が教育課程の中核に位置付けられ実施された。これは各教科・道徳・特別活動の枠を取り払って、特定のテーマに関する新たな学習内容・活動を編成する学習方法で、多くの場合、テーマや課題の設定が子ども自らの主体的な選択に委ねられた。各教科に関連はしているが、教科の一部を切り取って広げていく形で、

必ずしも各教科が扱う内容を遵守しているわけではなく、主体的な学び学習の色合いが強い、繰り返しや暗記、トレーニングなどがほとんど行われないうために学力の低下を招いたともいわれた。

(2) クロスカリキュラム

■表-1 クロスカリキュラム

これに対して、クロスカリキュラムは、複数の教科、科目の指導者が、横断的で現代的な課題に関するカリキュラム（学習指導要領や各教科シラバス）を作成し、計画的、関連的、考查的に指導していく方法で、その学習内容が教科の目的・枠組みを保ったまま連携して相乗効果を上げることを目指している。

- | |
|--|
| <p>①自ら課題を見つけ、自ら学び・考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力の育成</p> <p>②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育み、自己の生き方を考えることができるようにさせる</p> <p>③各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や態度等を相互に関連付け、学習や生活に生かし、総合的に働くようにさせる</p> |
|--|

2 幼・小学校教育への円滑な接続

(1) 幼・小接続の重要性

幼児期後期は、自主的な学びの芽生えが育ってきており、一人や仲間同士の活動だけでなく、クラス（〇〇組）の共通の目的を意識したり、自分の役割を理解して、集団の一員として自覚するようになってくる。今まで遊びを通して学んできた知・徳・体の学びの芽生えを統合し、小学校でスムーズに学びの基礎へ高められるように育てていくことが重要となる。

さらに、小学校入学とともに始まる学校の時間感覚（45分授業と10分休みの連続日課）や集団行動のきまりを理解・遵守できるような指導も段階的に取り入れながら、自分の興味・関心に基づく遊びの中から課題を発見したり、調べたりする学習も取り組んでいくことが大切になってくる。

また、小学校で問題になっている「小1プロブレム」（①集団行動がとれない②授業中に座ってられない③先生の話を受けないなど学校生活に適応できないために起こす問題行動など）の発生防止につなげる取組を実施することは小学校にとって大きなメリットになる。

このように、子どもの発達や学びの連続性を保障することが、円滑に接続し、教育の連続性・一貫性を確保しやすくなると考える。

(2) 小学校との接続に必要な幼児の姿と課題

幼児期の発達段階を踏まえれば、年齢ごとに到達目標を設定することは適切とはいえないが、幼児期の終わりまでには育ってほしい幼児の姿を具体的にイメージし、教育課程を作成することは重要である。これは、小学校との接続のみならず、育つべき具体的な姿が小学校学習指導要領に示されており、幼児及び児童一人ひとりの個に応じた指導への具体的な取組を進めるためである。

そのためには幼稚園教育要領と同様に目標に沿って身に付けた力で、発達や学びの連続性を踏まえた道筋を教育課程として明らかにすることである。

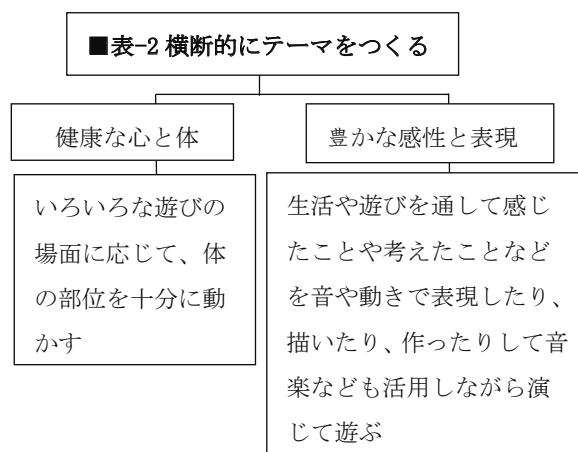
しかし、接続には様々な課題も残されている。平成 20 年度の調査では実態としては行われていないが約 8 割（注：引用文献 9）であったが、平成 26 年度の「文部科学省の幼児教育実態調査による接続状況では、「授業、行事、研究会などの交流はあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われていない」が約 6 割を占め、「授業・行事等の交流が行われ、教育課程の編成、実施が行われてる」が 17%、「接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更により良いものとなるよう検討が行われている」は 4.5%という状況で、かなり改善はされてきている。接続を阻む課題は、「接続関係を具体的にすることが難しい」、「幼少の教育の違いについて十分理解・意識していない」などと読み取れる。（注：引用文献 8）一方、連携している具体的な取組としては、①小学校のスタートカリキュラムを踏まえ、幼稚園においても接続カリキュラムを作成し、就学に向けた指導計画を作成した。②「幼児期から児童期への学びの連続性」に関する研修会を開いた。③幼稚園と小学校の研究テーマを同じにし、研究会への参加により教職員の資質向上を図っている。④幼少連絡会を開催し、それぞれの重点課題を出し合い共通に取り組んでいるなどがあげられる。しかし、実施している具体策や育って欲しい姿との成果や課題などはほとんど見られない。

3 クロスカリキュラムを活用した横断的な学習

円滑な接続のためにクロスカリキュラムで取り組むことは、学習内容が客観的に与えられ、従来の教科の目的・枠組みを保ったまま連携し、相乗効果を上げることができる。平成 25 年度全国保育士養成セミナーでも保育表現技術の系列における教科目（表現）間の連携として、各科目をつなぐ学習として効果的であるとされ、その必要性が重視された。さらに、小学校指導要領の総則にも「小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、・・・」（注：引用文献 10-1）とあり、接続の必要性を述べている。そこで行ってほしい連携は、合科・関連型より横断的な学習の方がより効果的といわれている。

(1) 幼稚園等における横断的な学習

健康、表現例にとると、まずこれを縦系にして、そこに横系を通し横断して関連づけていく。右表2のように、テーマを設定して、そこに内容・領域の関連を持たせることで、子どもたちに自ら考え、創造力を働かせ、具体的な学びをつくり出すことができる。



「表現」領域の内容をまとめてみると、豊かな感性と表現を「身体表現」、「音楽表現」、「造形表現」、「言語表現」の4つに分類でき、「健康」は健康な心と体を「体を動かし楽しむ」「健康・安全対策」と2つに分類できる。それぞれの専門性を保ちながら横断的にクロスカリキュラムを作成することは可能である。

さらに、小学校への円滑な接続を考慮すると、小学校入学後「やったことがない」、「分からない」、「楽しくない」、「行きたくない」とならないような互いの教育に連続性・一貫性をもたせる教育課程の編成も容易と考えられる。

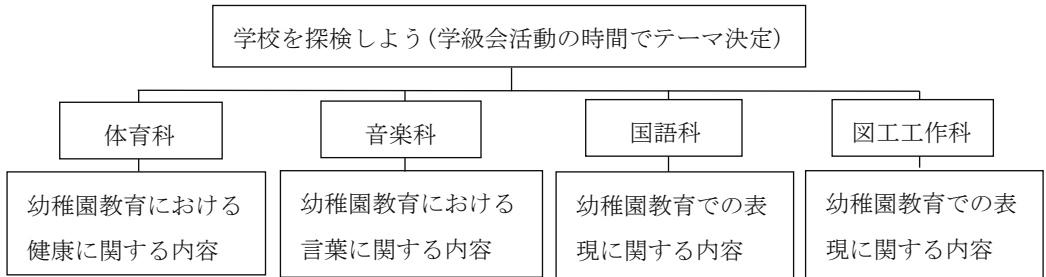
(2) 小学校における横断的な学習

幼稚園等における教育を卒業後、小学校では各教科、道徳、特別活動を縦系にして、そこに幼稚園同様横系を通して横断し関連づけていくことが望まれる。例えば、一つのテーマを設定し教科、領域間の関連をもたせることで子どもは他教科の知識や技能を活用して思考範囲を広げ解決に向かうようになる。このような実践を通して子どもたちには、多面的、創造的、統一的なものの見方、考え方、協同学習を通してのコミュニケーション力、追求から結果をまとめる力など様々な力を身に付ける。さらに、教科時数の削減ができ、教師による支援や各教科の振り返り学習なども十分確保でき基礎学力の向上につながる。

4 幼児教育と小学校との接続可能な教科について

小学校では、幼稚園で行われていた「健康」は主に体育と生活や道徳、特別活動に、「表現」は主に、国語、音楽、図画工作、体育に分類される。縦系と横系を結ぶように各教科を横断的につなぐと表3のような例も考えられる。

■表-3 横断と接続の学習例



このように取り組むと、幼児教育と違和感のない接続が可能となる。

さらに、幼小の目標及び内容・教科領域から考えると、より相互の科目に関連が見られ、内容（小学校では運動領域）構成でも連続性・一貫性が感じられる。

特に、体育では各運動の領域の内容には、体づくり運動では「心と体の関係に気付くこと、体の調子を整えること、仲間と交流することなど・・・」（注：引用文献 10-2）と書かれており、「健康」内容の「先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する」（注：引用文献 11）と類似している。また、下記表 4 の表現内容と表現・リズム遊びなども幼小の教科内容による関連が非常に強い内容である。

■表-4 幼小の健康・表現と体育の目標等の関連

幼 稚 園 教 育		小 学 校 教 育	
目 標	健	生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる	体 育
内 容 領 域	康	・体づくり運動 ・器械器具を使つての運動遊び ・走・跳の運動遊び ・水遊び ・ゲーム	
目 標	表	豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする	
内 容	現	・感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする ・いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ ・自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう	

5 幼児教育におけるクロスカリキュラムとは

それぞれの内容の学びを小学校へ円滑に接続させる試みとして、専門性や目標を保ちながら横断的なクロスカリキュラムの実践を行う。ここでは、内容「健康」と「表現」から様々な取組を通して豊かに表現する力を育むことにした。

(1) 幼児体育の学びから

幼児の身体活動は、遊びの中で自然に多様な身体の動かし方を身に付け、それを繰り返すことで身体機能・運動調整力として習得していく時期である。「運動して楽しい」「気持ちいい」「もっと上手になりたい」など体を動かすことを味わいながら意欲が向上し、更なる高まりを目指すような連鎖が起きることで生涯にわたって運動に親しみ、健康な体をつくる基礎ができる。このことが小学校低学年の体育と連携・接続していくことになる。具体的に、幼児期

後期はスキヤモンの運動曲線が示すように、神経系機能の発達が著しく、動きが滑らかで匠になり、全力で走ったり、跳んだりすることに心地よさを感じるようになる。さらに、ボールをつきながら走るなど基本的な動きを組み合わせた複雑な動きができるようになるなど、「体のバランスをとる動き」、「体を移動する動き」、「用具などを操作、活用する動き」が滑らかになっていく。

さらに、日常生活の色々な関わりから心を動かし、言葉で話したり、描いたり、作ったりしながら遊びに活用して様々な表現方法も身に付けていく。そこから表現する楽しさ、うれしさを味わいながら、物や動物などの見方、感じ方が育ち感性が次第に育まれる。

(2) 健康と表現を横断的な学習で編成するために

表現を4つに分類し、健康と横断的に学習活動を展開し、幼児体育として小学校の「表現・リズム遊び」に繋げるようにもっていく。幼児期は、上の表5の身体運動と表6の表現要素（日常生活や幼稚園等で音楽を聴いたり、歌ったり、作ったものから頭の中で創造したこと）を、体を使って表現することによって学習活動を展開していく。

■表-5 身体運動(健康)感覚

楽しい基本運動と感覚
・基本運動(歩く・走る・リズム走) ・平衡感覚・逆さ感覚・回転感覚(平均台、マット、鉄棒、ブランコなど) ・跳躍力・高さ感覚(トランポリン、跳び箱) ・ボールを使った遊び(投げる、受ける、転がす、蹴る)
組み合わせた楽しい運動
・用具を使った運動(なわ、ボール、フラフープ) ・ボールを使った遊び(サッカー) ・ルールのある遊び(鬼遊び、リレー、障害物競争、ゲームなど)

■表-6 表現の要素

表現の要素
・表現したいイメージの動きを考える ・全身を使って表現する ・止まらずスムーズに動く ・になりたいものになりきる

6 クロスカリキュラムの実践

ここでは、東川町幼児センターの幼稚園教育と東川小学校のプログラムから、幼児教育「健康」・「表現」と小学校「体育の運動領」の円滑な接続の実践や成果・課題と今後の方向性について考えてみる。

(1) 東川小学校低学年の体育「表現リズム遊び」

基本の運動は子どもから運動したいという欲求と、楽しさや喜びを味わいながら運動好きにさせることから始まる。「走る」という行為だけでも競争型、達成型、克服型など様々な取り組み方法がある。

ここでは歩く・走る・スキップ・踊る（一人で、友達と手を繋ぐなど）といった様々な運動要素と動物を

■表-7 体育の年間指導計画(1年 わくわく動物ランド/リズム遊び)

模倣して成りきるという動作を組み合わせることで、幼児教育の健康と表現を接続した。表-7（注：小学校と合同で作成）は、体育年間 102 時間の中で表現リズム遊びとして 10 時間 2 教材を実施している。子どもたちの特徴としてリズム感にやや難があり、多様な動きは苦手であるが体を動かすことが大好きである。そこでリズムカルに動く様々な動物を模倣する「わくわく動物ランド」を 6 時間実施した。子どもたちには体育（表

年時	33	34	35	36	37	38
単位	1	2	3	4	5	6
(分)	リズム遊び【4時間】 学習のねらい…リズムに乗って、踊って遊ぶ 学習の進め方…①→②の順に行う					
10	①いろいろな曲のリズムに乗って、友達と自由に弾んで踊る		②動きを変化させ、みんなで楽しく踊る		*前回実施したリズム遊びの復習も導入で実施	
20	わくわく動物ランド【6時間】 学習のねらい…いろいろな動物になって、踊る 学習の進め方…毎時間、めあて1を十分行ってから、めあて2に進む					
30	☆めあて1…いろいろな動物の様子をまねて踊る					
40	☆めあて2…好きな動物を選択し、話をつくって踊る					
主な内容	・毎時間まとめは、見せ合ったり、みんなで一緒に踊る 【リズム遊び】 ・弾んで踊る…へそで弾む/走ったり、スキップしたり ・友達と自由に踊る…手をたたき合ったり、つないだり ・グループで踊る（犬のお巡りさん） 【わくわく動物ランド】 ・いろいろな動物や木・花(象、犬、ライオン、兎、鼠、木) ・話す（動物園の一日）					

■写真-1ライオンとサル



現リズム遊び)に対する違和感はさほどなく、楽しく仲間と共に活動した中から、多様な動きの基礎を培ったり、自分を積極的に主張していくという社会性も育むことができる。

(2) 幼児センターにおけるクロスカリキュラム「健康」と「表現」

様々な運動要素と表現の要素を取り入れて横断的な活動を行うことは、幼児の感じたことや考えたことを自分なりに表現する幅を広げ、感性や創造性をさらに豊かに育む。ここの幼児は明るく元気な子が多くアクティブな遊びが大好きである。半面、総じて自分の思いを表現することが苦手である。様々な体験や経験の不足も関係しているのではないかとと思われる。また、数年前から入学後「小1プロブレム」に陥る子どもが出てきていることから、小学校入学前に「プレスクール事業」を展開してきた。この年代の幼児は直接的・具体的なものや人とのかかわりを通して新たな知識を身に付ける学びの芽生えの時期であるので、小学校行事を想定した屋外における身体体験活動(キトウシ運動公園散策)や食育活動での野菜作り、小学校1年生とのミニ運動会交流など様々な活動を展開した。

■表-8 プレスクール事業のねらい

5歳児を対象として、様々な体験活動を通して将来の人間形成の基礎・土台作りをしていきます。その活動によって小学校入学前に学校生活に必要な力を身に付け、小学校入学への大きな段差を乗り越えやすくしていく。

さらに、小学校の各教科へのスムーズな移行を目指して、同内容の遊びを実施することで違和感が緩和できるよう領域統合を実施した。

ここでは、5歳児の年間指導計画の指導内容に、健康「いろいろな遊びを友達と一緒にルールを作ったり、工夫して楽しく・挑戦し最後までやり遂げて満足感を味わう」、表現「いろいろな楽器に触れて楽しんだり、合奏したり、リズムに合わせて体を動かしたり、遊びに使う物を友達と作って楽しむ」(注：引用文献 12)とあり、小学校体育の表現リズム遊びにスムーズに接続することが可能である。

このことから、健康と表現の目標を共有しながら、表現活動として遊びを中心に頭・心・体を動かしながら表現する身体表現を展開している。絵本を見ながら創造力を膨らませたり、動物や乗り物、絵本の登場人物などになりきって遊ぶ中から友達と仲良く豊かに表現することを身に付けさせた。

① 旭山動物園に行こう

幼児は家庭で飼っている犬や猫、動物園で見たライオンやキリン、絵本で見たパンダや象など動物の動きを想像するだけでわくわくしてくる。そんな動物をイメージし創造力を働かせて様々な動きを面をかぶって遊んでもらった。今回東川福祉専門学校こども科の学生に協力を依頼し身近な動

■表-9 指導略案「動物園へ行こう」(抜粋)

	指導内容	幼児の動き	指導者の動き
導入	動物園の話	・列毎に座って話を聞く ・面を選択し動物の動きを想像	・教師の声かけ
展開	・動物園到着 ・動物ごとに群れをつくる ・群れでの動物ごとの動きを想像 ・檻が壊れ、動物が脱走	・動物園に到着 ・早々に群れと様々な動きを演技 寝起き、警戒 あくび、歩く 走る、怒り 食事、就寝 ・脱走した動物の創造的な動きを演技	・動物ごとの動きを動物園の一日として演技させる ・檻から脱走した動物が自由になった喜びを演技させる

物の面を猫・犬・ねずみ・象・豚・熊・うさぎの7種類制作した。その面を幼児全員につけさせ、動物になりきって旭山動物園の一日をプレールームで演じた。この年代の幼児は、目の前にないものごとを思い浮かべる表象が発達する。ごっこ遊び、描写、目の前にない動物などを鳴き声で表すような表現力、例えばねずみは「チューチュー」と声を出しながら四つん這いで歩いたり、飛び跳ねたり、さらに象が食事後腹いっぱいになり横になって鼻を上に向けて寝るシーンやねずみが立って歩くなど豊かな創造力を培っていくことになる。

■写真-2 動物が脱走した



② 身体表現による動きの変化

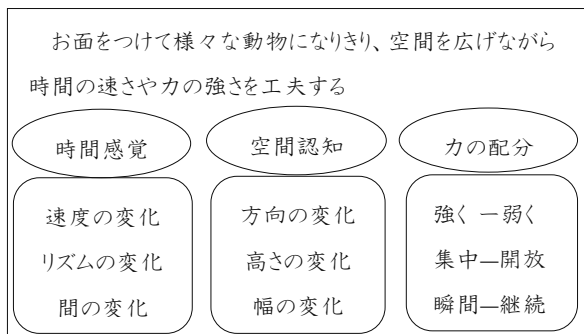
5歳児は、一人遊びから、友達との集団の役割分担もできるようになり、社会性も発達してくる。さらに表-10ように動きを構成している要素が少しずつダイナミック、複雑に表現できるようになる。そこで、今回幼児の動きに変化・発展を見通して楽しませ、世界を広げるように工夫した。「象さんが鼻を少し動かします」「だんだん大きく動かします」「ぐるんぐるんと大きく揺れます」などと動物ごとに同じ視点で表現方法を工夫して幼児の日常にない動きまでも体験させた。様々な運動要素

と十分な運動量から幼児の豊かな感性が育みつつあることが伺える。

8 研究の成果と今後の課題

■表-10 動きの発展と指導上の観点

幼小の円滑な接続とともに幼稚園教育の指導内容を横断的に捉えたことは、幼稚園から小学校の授業へ違和感なく接続できることを強く確信した。今回の幼稚園の「健康」と「表現」によるクロスカリキュラムの実践は、他の指導内容にも大きな可能性を引く出し、横断的な学習



を推進できると考えた。さらに小学校体育の「表現リズム遊び」とは同内容で接続することで、内容を模倣などの遊びから表現リズム遊び・表現運動へと高めることができると考えられる。また、ピアジェの認知発達理論で示されているように、幼児と小学校低学年児童はともに成長期が前操作期のためほぼ同じ発達段階を示す。そのため教育環境の段差をできる限り少なくすることで、学びの芽生えから学びの基礎へとスムーズな接続が可能になる。今回、動物になりきり面をつけて遊んだが、事前に面を作るためのイメージや雰囲気づくりと遊ぶためのストーリーの更なる工夫が子どもたちの健やかな成長には不可欠である。

<参考文献>

- 1 石井見晴他編「保育の中の運動遊び」 萌文書林 2011 年
- 2 井上勝子他編「豊かな感性を育む 身体表現遊び」 りょうせい 2016 年
- 3 速水敏彦編「教育学と学びの心理学」 名古屋大学出版会 2013 年
- 4 学校体育実技指導資料第9集 文部科学省 2013 年
- 5 東川小体育科年間指導計画、幼児センター教育・保育計画、プレスクール事業報告 2017 年
- 6 智原江美・下口美帆 クロスカリキュラムによる領域「表現」の総合的な実践力習得のための試み p 85～90
- 7 源河雅代 表現する意欲と豊かな感性を育てる援助の在り方 p 1～4

<引用文献>

- 8 文部科学省初等中等教育局幼児教育課「平成 26 年度幼児教育実態調査」 P 15～17
- 9 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議
「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」(報告) 2010 年
- 10-1 小学校学習指導要領総則第4 10-2 体育編第2章第2節2各領域の内容
- 11 幼稚園教育要領 第2章健康
- 12 東川町幼児センター「教育・保育課程」2017 年